

無双直伝英信流正統第二十代宗家 河野稔天劍百鍊先生

伝承会報

第十二号 令和二年十月二十日発行

編集発行 鈴木伸昌

河野百鍊先生お持ちの剣道防具について

河野先生の奥様から、かつてこんな話を伺った。

「河野の持ち物に、世界三大胴、剣道の防具の胴ですね、というのがあって、ヒトラー、ムツソリーニ、そしてうちにある胴が、その三大胴というのだと聞いた事があります。」

その話は、昭和三十五年生まれの筆者にとって、俄かに信じがたいエピソードであった。

それから数十年、たまたまインターネットで古書群を検索していた時に『総統の防具』という本を見つけた。作者は、帝木蓬生。映画好きな小生、タイトルから興味を覚え『十二年目の映像』、映画を見て原作に触れなくなつて『三たびの海峡』の二冊を読んでいたのです、その名に覚えがあった。

総統 といえばヒトラー、河野の奥様の話がよみがえつた。早速取り寄せた。日本経済新聞社平成八年四月発行の本であった。その後、新潮文庫で「ヒトラーの防具」として改題、発行されている。



ヒトラーの前で日本の陸軍軍人が居合を披露する場面もあるこの小説は六百二十二頁に及ぶが、戦前にヒトラーに贈られたという剣道の防具が見つかった話から始まる。

そこにはこんな記述がある。

「アルフレートは黙って胴を手にとり、裏側を見せる。赤漆の裏張りに書かれた黒い文字が眼に飛び込んできた。

贈 ヒットラー閣下

大日本聯合青年團 理事長 島崎龍一郎

皇紀二千五百九拾八年四月」

この年は昭和でいうと十三年、二年前の十一年に日独防共協定が結ばれ、二年後の十五年に日独伊三国同盟が結ばれる。

小説のあとがきに、こんな一説がある。

「赤門剣友会の同門でパリ在住の好村兼一氏から、ヒットラーの防具の存在を知らされたのは、一九八九年の春だった。ヒットラーと剣道防具の組合せに、初めは耳を疑った。しかし半世紀前の日本とドイツの二人三脚ぶりに思いを馳せればさして奇異ではない。私たちがその歴史的事実を故意に忘れていただけである。」

本当のことなのか。では送り主の大日本聯合青年團とは何か。その存在すら知らなかった己の浅学を恥じた。

日本大百科全書「ニッポニカ」に依れば、

「男子青年團の全国的な連合組織。大正期に入ると内務・文部両省による青年團の統制が強化されていたが大正十三年には道府県段階の連合青年團が三十一府県に達し、全国組織結成の気運が高まった。

そこで政府、日本青年館、青年団側の三者により大日本連合青年團の結成が進められ、大正十四年四月に正式に発足をみた。理事長は日本青年館理事長が兼任し、初代理事長には一木喜徳郎(いちききとくろ)が就任、本部役員としての理事には、青年団側からの四名が代議員会で選出され、日本青年館側から五名が理事長の委嘱により選出された。下部の町村青年團の指導者は町村長や小学校長など地域の有力者がなつた。昭和元年には全道府県が加盟を完了し、全国の青年団指導機関として大きな役割を果たした。戦時体制の進展とともに昭和十四年四月より強固な統制団体として大日本青年団に改編され、昭和十六年一月には大日本青少年団となり、翼賛体制の一翼を担うこととなった。」なお、講習所の所長には『次郎物語』の作者下村湖人も一時期、名を連ねている。

つまり、ヒットラーに防具を送ったのは、いまだ強固な統制団体に改編される前だったことになる。

誠にもってインターネットは有難いもので、大日本聯合青年團が「青年」なる雑誌を発行していたことが分かった。早速古書ネットワークを駆使し、防具を送った昭和十三年の「青年」を探した。空襲を経てどのくらい残っているか不安だったが、幸い昭和十三年としては、九月号だけが見つかった。なんと「日独青少年團交歓記念号」とある。その中に、大日本聯合青年団主事による昭和十三年に学生武道使節団がイタリーとドイツに向かったことについて記した一文があった。内容を一部抜粋引用する。

「築くものの力 学生武道使節の責務を果たして」

大日本聯合青年団主事、多羅尾光道氏

「四月十八日イタリアに着いて」

「今ムッソリーニは新しい都市をぞくぞく建設しつつある。その一つのポロメチアというところで定礎式が行われ、ムッソリーニ首相もここへ臨席した。私たちも日本代表としてム首相の席の直ぐ左側にあたる主賓席に列していた。」

「私たちの日本武道の公開は、ナポリ、ローマ、ヘレンチエ、ミラノの四か所で行ったが」

「二十七日、首相官邸の大広間で、私たちは香坂理事長からのメッセージ並びに剣道具一式を恭しく贈呈した。ムッソリーニは丁重な謝辞を述べ「日本の青年たちにくれぐれもよろしく」と力強くいわれた。」

「丁度私たちがポロニアについたとき、ヒットラー独逸総統がイタリア訪問の途中、この駅頭を通過した。私たちも特別の席が設けられ、民衆にもまれながら、日章旗を押し立てて駅頭にこれを迎えた。すると民衆の波の中にこの日章旗の静かな姿が総統の眼についたのかヒットラーは通り過ぎる列車の中に立って、さっと右手を上げながら敬虔な態度で敬礼を送っていた。」

「五月十一日イタリアでうけた感銘を見に締めながらドイツのミュンヘンへ訪独の第一歩をふみ入れた。」

「十四日に突撃隊の兵営へ案内され、その夜ドイツで初めての日独青年交歓の夕べが催された。ヒットラー・ユーゲントの人たちによって体操やレスリング、フェンシングなどが演ぜられると共に、我々は武道を公開した。」

「二十三日はベルリンへ行き、一万五六千人の観衆が詰めかけた国立競技場で、私たちは又実に気持ちのいい試合をした」

この文中、確かにムッソリーニに剣道具を贈呈したことは記載があるが、ヒットラーに贈呈したことには触れていない。なお防具の送り主は大日本聯合青年団理事長の香坂昌康なる人物となっている。前述の小説「総統の防具」にかかれた理事長島崎龍一郎とは、小説故の創作名ということが判明した。

この学生武道使節団について、別の資料を見つけた。出展が明らかではないが、文中、「整体育会からは経済学部余暇一年の羽鳥輝久」という書き方をしており、羽鳥輝久氏は慶應義塾大学卒なので、慶應義塾大学の歴史をつづった本かもしれない。

資料検証のため他の資料を探したところ、慶應義塾体育会略年表に、「昭和十三年三月十八日外務省派遣、独伊訪問親善学生武道使節に選ばれた羽鳥輝久(柔道)、太田茂(剣道)がこの日神戸出帆」とある。この資料は慶應義塾大学関係の資料と見て間違いないであろう。さて、話を戻そう。

表題は「親善武道学生団を盟邦独伊に派遣」とある。訪問全行程について書かれているので内容を引用する。

「外務省は日独伊三国の親善を計る為、三月十六日から六月二日、全国大学、高専からの人選中だったが、昭和十三年二月二十七日左の通り決定した。選ばれたのは榮譽の学生は柔道、剣道各六名で、いずれも人格、学業、技倆とも日本の学生代表として恥かしからぬ青年ばかり。整体育会からは柔道に経済学部余暇一年の羽鳥輝久四段当時一九歳、剣道からは医学部予科二年の太田茂三段当時二十三歳が参加。今年三月一六日勇躍、鹿島立った当時の感激を、三月十七日読売新聞の記事から拾うと

『友邦独逸、イタリアへ使する晴れの学生武道使節、多羅尾剣道、田口柔道兩監督以下十二名は一六日夜半東京駅発列車で賑やかに壮途に上がった。隆々たる肉体と大和魂を揃いの紺のブレザー・コートに包んだ一行が大日章旗を先頭にプラットホームに現れるや、待ち構えた歓送團は校旗を打ち振り嵐のような熱狂、校歌応援歌が爆発して流石の猛者たちの眼にも感激の露が光っていた。』

その後一行は伊勢神宮に参拝、三月一八日神戸出帆の照国丸で、上海、香港、シンガポール及びコロンボを経て、四月十八日朝ナポリに入港、ローマ、フロレンス、ポロニヤ、ミラノのイタリア各地に於いて、日本武道の精華を披露、五月十二日ミュンヘン、ニュルンベルグ、ドレスデンケムニッツ、ライプチヒに親善の実を挙げ、五月二十一日雨けむるベルリンに入った。この間、両国は國を挙げて一行を迎え、堀田駐伊、東郷駐独兩大使を初め在留邦人の歓迎も又歡を尽くすものであった。

更に武道使節として最も面目を施したことは、四月二十七日ローマ、ヴェネチア宮殿に於いて、ムッソリーニ首相に、又、ローマ訪問途中のヒットラー総統にはポロニヤ駅頭で謁見したことである。ムッソリーニ首相の如きは武道使節團の訪伊にいたく感激し、ボメチアの地鎮祭に参列した一行に対し自分から「日本万歳」の音頭をとり集まった数万人の民衆がこれに相和すという劇的シーンもあった。五月二十六日オリンピック会場での武道公開を最後にベルリンを去り、ハンブルグに向かい、更にベルギー領を経て、三十日パリに着、杉村大使初め在留日本人の歓迎を受け、六月一日マルセーユより照国丸に乗船、本線は六月二日午後六時故國に向けて出版した。』

以上の事から、河野先生お持ちの胴が、まさしく世界三大胴の一つであることは事実と認定してよいと思われる。

ここで二つの疑問点が残る。

小説あとがきに書かれていた「パリ在住の好村兼一氏から、ヒトラの防具の存在を知らされた」とあるが、

知らされたというのは、「その胴が現実に存在することを知らされた」のか、「そういう胴が存在した事実があったことを知らされた」のか。

そして、もう一つ、河野先生の手元にある胴は、いったい何なのであろうかということである。

ヒトラとムッソリーニに贈呈するに際し、同じものを製作し日本側に記念として残した胴なのか。

そしてその胴がなぜ河野先生の手元にあるのであろうか。

河野先生は、大日本聯合青年団に関係していたのであろうか。

しかし、その手掛かりとなりうる武道使節團の剣道使節六名の名前は、調べても判明しなかった。

そこで、河野先生奥様に、そのあたりのことをお尋ねしたが、詳しい経緯はご存じなかった。

資料として、くだんの胴の写真の手配をお願いした。

届いた写真を見ると、胴裏の一文に依り、河野先生がこの胴をどこから入手したか判明した。

何とこの胴は尾形郷一先生から河野先生に贈られたものだったのである。



桐紐等から使用の形跡が認められる。

桐の裏の一文。浅学故読み下せないところは□で記載する。

昭和十□年

贈呈 独逸 ヒットラー

伊太利 ムツソリーニ

世界三胴之一

うつ人も

うたれる人も

土器の

砕けて見れば

元の土くれ

以作

奥州桜花

之坊

尾形郷一先生依拜受

河野百錬

□

尾形郷一先生は、徳島県ご出身、貫心流免許皆伝、小川金之助先生の弘道館剣道八段、無双神伝抜刀術兵法十七代植田平太郎先生より同流十八代を継承。(全日本居合道新聞昭和五十年七月三十日号)

尾形先生は、全日本居合道連盟連盟では副理事長、河野先生亡き後会長職に就かれ、後年全日本居合道連盟を離れ、全国居合道連盟立ち

上げにご尽力なされ全国居合道連盟初代会長を勤められた先生である。

全国居合道連盟では「四十年史」という本を出版している。小生は当該連盟に属していないが、道縁によって知り合えた同連盟の長瀬一平先生のつてを頼り、全国居合道連盟連盟理事長の吉川元莊先生に、「四十年史」の入手について懇願したところ、快く応じて下さった。「道を同じくするもの相親しみ」を実感したものである。

その「四十年史」の尾形先生特集記事の中に、尾形先生の孫にあられる福井勝彦先生という方が居られる事を知った。お孫さんであるなら、尾形先生が大日本聯合青年団と関係があったか、どういいう経緯でこの胴を尾形先生がお持ちだったかをご存知かもしれない。

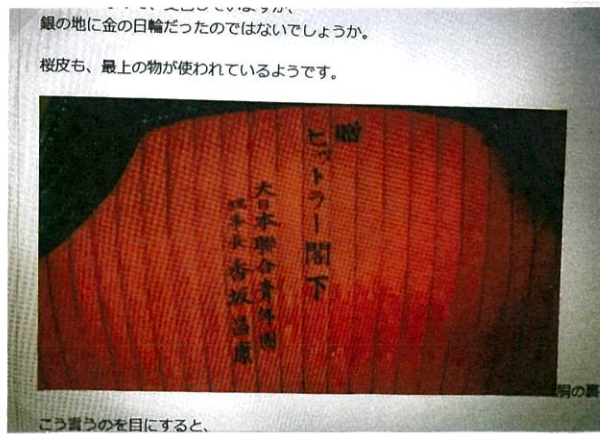
矢も楯もたまらず、吉川元莊先生に、福井先生の連絡先を教えてください。矢も楯もたまらず、吉川元莊先生に、福井先生の連絡先を教えてください。引用させていただきます。

「お手紙拝見いたしました。なんともマニアックなお話で、拝読しながらゾクゾクいたしました。

私の弟が全日本剣道連盟で剣道をしております。鈴木様のお手紙を見せましたところ、「ヒトラーの防具」のことは知っておりました。現在残っている防具は一揃いで、全剣連が所有しているそうです。

弟は平成九年、京都で剣道の世界大会が開催されたおり、伏見桃山城入り口に「ヒトラーの防具」が展示され、大会会場からタクシーに乗って見に行きました。面と胴と垂のセットで、甲手は無かったそうです。よく残っていたものだと思えます。ネット上に載っております。胴裏面の画像、同封いたします。

弟が申しますのには、今の防具に比べれば、少し小さめの胴で、ほぼ未使用状態の防具だったそうです。



ムツソリーニに同様の防具が渡されたのかどうかは定かではないようですが、河野先生に「ヒトラーの防具」と同様の胴が伝わったということは、大変興味深いお話です。

尾形郷一先生は、小学校の教員をされ校長で退職。その後は大代特定郵便局の局長をされました。．．．中略．．．「ヒトラーの防具」の謎が解き明かされますことをお祈りいたします。」

「ヒトラーの防具」は実在したのである。そして、小説「總統の防具」の表紙及び裏表紙の防具は、本物の写真だったのである。(河野先生お持ちの胴には、日の丸がついていないが、ヒトラー總統とムツソリーニ首相に贈るものにだけ日の丸をつけたということのほうが、逆に自然に思える。)

早速、福井勝彦先生に、この胴を尾形先生が持っておられた経緯、尾形先生が大日本連合青年団に入っておられたとか、理事長の香坂様と親交があったとか、河野先生に送られた理由等々、なにかご存知でしたらお教え願いたい旨のお手紙を認めたところ、有難いことに、直ぐお電話を頂いた。

残念ながら、福井先生にこの胴のお話は伝わってはいなかった。ご親戚にも尋ねていただいたが、尾形先生が亡くなられて四十年、わからないということであった。

胴つながりでいうと、「イノシシの皮張ったのと、小川金之助先生から頂いたという赤い胴は見たことあるんですけど、桜の皮のは見たことないです。」とのことであった。

また、胴裏の文(五頁下段)の、「尾形郷一先生依拝受 河野百鍊 □」の筆跡は河野先生のものだが、その前の部分の筆跡について伺ったところ、尾形先生の筆跡ではないとのことであった。

ヤフーブログ「活人剣&殺人剣」(中年剣道愛好者の四方山話&釣り&温泉&その他趣味の広場)にこんな一説を見つけた。

「石原範士・武專時代 三国同盟・ドイツ・イタリアへ武道使節団として派遣。剣道六名、柔道六名。その時の日記が出てきました。ご遺族より拝借して、ただいま解説中(連盟のK西先生が)。これは大切な資料になると思います。」

又、その際に贈呈され、各地で演武の際に使用した輪島塗で桜の木が描かれた胴。これも現存します。然し、物欲が全くない範士、貴重な胴を普段の稽古で使用していたため、桜が殆ど消えてしまっています。何とか復元できないものかと。ただいま思案中。輪島塗の工房へお願いして、貴重な品です。何とか復元できないかと、その費用をどうしたものか。また、はたして、できるものなのか。ご遺族、連盟のお許しを頂ければ復元計画を立案したいと思います。」

「桜皮の胴」ではなく、「桜の木が描かれた」とあるので、武道使節団参加者に桜つながりで、桜の木が描かれた胴が贈呈されたということなのだろうか。

この武專・武道専門学校出身の石原範士について調べた。岡山県に確かに武專出身の剣道範士で石原という先生が居られた。石原忠美(たよし)先生。この先生が前述の石原範士と同一人物なのか。石原先生は大正五年のお生まれ、武道使節団がイタリア・ドイツに向かった昭和十三年は二十二歳、年代としてはぴったりと思われる。著書「円相の風光 生涯剣道を求めて」を探し求めて読んだが、武道使節団のことに触れただりはなかった。石原先生は武專における小川金之助先生の弟子であり、明治二十九年生まれの尾形先生は小川先生の道場における弟子。つまり学んだ場所は違えども、お二人は兄弟弟子という

ことになる。

或いはまた、他にも武専から武道使節団に選ばれた方がおられ、その方の持っていた桜皮胴が小川金之助先生から尾形先生に伝わったのか、想像は膨らんだが、再度このブログを開こうとしたところ、ヤフーブログ自体が閉鎖されており、追跡の道は閉ざされてしまった。

とはいえ、河野の奥様の一言を発端として、道縁によって導かれた諸先生方からの惜しみないご協力のお蔭で、ここまで突き止めることが出来ました。感謝感謝であります。

最後に、資料探索中見つけた興味深い記事を紹介して稿を終えたい。

◎大阪府柏原市のホームページ、文化財課の記事

「ヒトラーが堅下に！？ ヒトラー・ユーゲントの来訪」

第二次世界大戦前、堅下にアドルフ・ヒトラーが来たことがある！？
かつて、こんな誤解があった。実際に来たのはヒトラー・ユーゲントの青少年たちである。昭和十三年十一月一行十人が、大阪府中河内郡堅下村を訪問、大泉地区(現柏原市大泉)のブドウ園を見学するなどしている。地元の青年団や在郷軍人会による大歓迎を受けたという。全国各地でも大歓迎を受け、当時「万歳ヒトラー・ユーゲント」という歌も作られたようだ(作詞・北原白秋)。昭和十一年の日独防共協定をきっかけとする両国の関係強化の取り組みの一環として、この年両国の青少年が相互訪問している。日本からは、大日本聯合青年団の一行がドイツを訪問したという。流石に、ヒトラーが堅下に来たこと誤解している人は少ないが、当時を知る人の中でもドイツの軍人たちの一行が来たと思っている人は少なからずいるようだ。

ヒトラー・ユーゲントというのは当時のドイツの青少年組織である。

ドイツでは昭和十一年に国の唯一の青少年団体として、法律ですべての青少年(男子十歳から十八歳、女子十歳から二十一歳)の加入が義務付けられていた。日本語では「ヒトラー青少年団」「ドイツ少女団」などと訳されていた。・・・中略・・・ドイツの青少年たちが堅下を訪れた昭和十三年頃、第二次世界大戦前の厳しい時代との印象がある時期だが、同時に堅下のブドウ栽培が最盛期だった時期でもあるようだ。

堅下(柏原市)は筆者にとって個人的に、思い出深い場所なので右記の記事をみつけたときには驚いた。

柏原市のJR柏原駅にほど近く、河野先生の直弟子の長谷川俊明先生が住んでおられた。

河野先生は、昭和四十二年十月一日ご自宅二階に「洗心百鍊館」という道場を開かれた。ご門弟は中垣雅司先生、谷島一雄先生、そして長谷川俊明先生である。長谷川先生はそれこそ膝突き合わせる距離で河野先生の業を盗まれた先生であられる。

柏原は、その長谷川先生に教えを乞いに通った場所なのである。その柏原駅から北上したところに近鉄の堅下駅がある。堅下駅からは河野先生の奥様の家に向かった思い出があるのである。

また、堅下南小学校では、長谷川先生が一期指導に当たられていた柏原養成館道場が今も活動を続けておられる。

筆者も遠い昔、二度ほどお邪魔し、楠谷富男先生、中村正勝先生、藤井輝幸先生に教えを乞うた。そして、その小学校の近くにブドウ畑があったことを覚えている。

ああ、あの地にヒトラー・ユーゲントが来られたんだなあと思ひ浮かぶことの出来る地なのである。